特集 世界の住まい 今

炕（カン）のある家―中国北方農村の住宅

山田 七絵

「村々の　炕たく煙や　霜の朝」
（東宮鉄男（とうみやかねお））
「おんどるの　上で女房とねて見たし」

「炕」（または「火炕」）とは、中国北方の住宅を特徴づける暖房施設の総称である。朝鮮半島では「オンドル」と呼ばれる。台所のかまどで生じた熱気を寝台の下の空洞に送り込んで暖をとる仕組みになっており、現在でも華北から東北一帯の農村にみられる。真冬には零下一〇～三〇度にもなる中国北方では、一家が長く厳しい冬を乗り切るためになくてはならない設備である。特に冬場は、家族は炕の上で食事を取り、炕の上で眠る（写真1）。北方の人々にとって家族の原風景といえるだろう。本稿では、各種資料と筆者の見聞をもとに中国北方農村の住宅の姿をお伝えしたい。

1. 炕の上での春節の食事。奥に現代的なシステムキッチンが見えるが、かまども依然健在（山東省煙台市莱陽、2010年2月お茶の水女子大学・船戸はるな氏撮影）

●中国農村住宅の平均像

第二次農業センサスに基づき、農村住宅の平均的な姿を整理すると表のようになる。参考までに東部、東北地方の数値も掲載した。

まず住宅の外形的特徴から述べると、一戸当たり居住面積は平均一二七・七平方メートル、一人当たり居住面積は二七・八平方メートル。建材はレンガ、コンクリート、木材が主流、全体の三分の二が平屋で高層は少ない。

次に生活インフラの整備状況をみると、全体として飲用水源は水量の安定性、安全性などの理由から井戸への依存度が高いが、発展した沿海地域を含む東部では上水道普及率が四割以上に達している。炊事には現在でもかまどが使われており、燃料は約六割の家庭で薪炭（しんたん）や稲・麦わらなどのバイオマス、次いで約四分の一の家庭で石炭、残りの約一割の家庭で各種ガスが用いられる。燃料の構成比率には地域差があり、森林資源の豊富な東北では薪炭への依存度が高く、逆にバイオマス資源の少ない西部乾燥地域では石炭が普及している。東部では家庭用ガス、温暖な華南・西南部では畜産排せつ物等を発酵させたメタンガス利用が比較的多い。戸別トイレの普及率は低く、全体の四二・九％は未整備である。整備されているトイレのうち汲み取り式が八割近くを占め、水洗式は東部地域（二六％）以外あまり普及していない。

続いて耐久消費財の普及状況を見てみよう。同資料によれば九八・七％の村に電気が通っており、カラーテレビの普及率は九割近くに達している。電話の普及率はすでに携帯電話が固定電話を超え、全体で約七割、東部では八六・一％に達している。最後に暖房設備であるが、寒冷な東北部では炕の普及率が八五％に達しており、その重要性が明確に表れている。東部では都市化に伴いエアコンや暖気が一定程度普及しているが、寒冷な北京市、山東省における普及率を挙げるとエアコン一・八％、暖気一一・九％に対し炕は二六・一％と明らかに高い。

●農村の住宅制度と課題

中国では都市と農村で土地および住宅の所有制度が異なる。都市

2. 建設中の村民むけ集合住宅。C村にはまだこのような動きはない（山東省潍坊市昌楽、2009年7月筆者撮影）

表　中国農村住宅の平均像（2006年）

指　標		全　国	東部地域	東北地域
平均居住面積（平方メートル）		127.7	135.9	80.0
	一人当たり居住面積	27.8	31.5	21.9
住宅の類型別割合（%）	高層	30.5	32.3	2.2
	平屋	66.8	66.5	96.8
	その他	2.7	1.2	1.0
住宅の建築資材別構成比率（%）	鉄筋コンクリート	6.0	7.9	2.4
	レンガ、コンクリート	39.4	43.2	23.4
	レンガ、木材	44.3	45.5	58.7
	土	9.6	3.1	15.3
	その他	0.7	0.3	0.2
飲用水源の構成比率（%）	水道水	23.1	44.2	15.0
	井戸	41.8	37.6	75.9
	表流水	27.8	15.3	9.0
炊事に使う燃料の構成比率（%）	薪、小枝、ワラ等	60.2	53.1	88.2
	石炭	26.1	18.5	7.4
	石炭ガス、天然ガス	11.9	27.2	4.0
	メタンガス	0.7	0.2	0.1
	電気	0.8	1.0	0.3
	その他	0.3	0.0	0.0
トイレのタイプ別構成比率（%）	水洗式	12.8	26.0	1.3
	汲み取り式	44.3	38.3	49.2
	簡易式、又は未設置	42.9	35.7	49.5
耐久消費財の普及率（台/百戸）	カラーテレビ	87.3	97.5	97.1
	固定電話	51.9	68.2	64.4
	携帯電話	69.8	86.1	63.7
	パソコン	2.2	4.8	1.0
	バイク	38.2	50.9	34.3
	自家用車	3.4	5.1	2.6
冷暖房器具の普及率（%）	エアコン	4.8	10.4	0.1
	暖気	5.2	10.3	14.2
	炕	17.8	15.6	85.1
	なし	53.3	17.4	0.0
	その他	18.9	46.3	0.6

（出　所）参考文献②
（注）1）特に断りがない限り、農家戸数ベースの割合。
（注）2）「暖気」とは、主に長江以北の都市部の高層住宅に見られる、熱水を通したパイプにより室内を暖める全館集中型の暖房設備。

の土地および建国後に建てられた住宅は全て国有であり、民営化が進む一九八〇年代中盤以前は都市住民は国営企業などの職場から住宅の分配を受けていた。その後職員の福利厚生を丸抱えする雇用制度は崩壊し、都市住民は「商品房」と呼ばれる一般住宅の年限付き使用権を購入するようになった。

一方農村の土地は集団所有で、住宅は私有が認められている。都市近郊では非農業収入で蓄財した農村住民が都市部で「商品房」の使用権を購入し、元の家を処分せず放置する「空心村」が発生し、農村の土地利用効率低下が問題となった（参考文献①）。第一一次五カ年計画以降、社会主義新農村建設のスローガンの下農村の都市化、生活環境の向上、土地利用の合理化が政策課題となった。集合住宅を建設し、住民の移住を促す動きもある（写真2）。

●いざ、訪問！

筆者は幸いにしてこれまで数回、山東省、北京等の農家を訪問する機会を得ている。本稿では山東省煙台市蓬莱（県級）市C村の友人宅を例に、農村の住宅事情を紹介したい。蓬莱市は山東半島北端に位置する沿岸都市で、C村は二〇キロほどの距離にある。幹線道路に近く立地条件は比較的良いものの、蓬莱市から村への公共交通手段が少ないため村民は専ら顔なじみの白タクを利用する。筆者の訪問を受け入れてくれた友人は当時筆者が所属していた北京の研究機関で学ぶC村出身の大学院生で、東京大学の田原先生の紹介で知り合い、二〇〇九年夏に彼女が帰省中のところを訪問した（C村の詳細は参考文献③）。

友人と白タクで村に向かう途中、幹線道路の両側に果樹園や畑が広がる中、茶色いレンガ屋根の家々が村毎に固まって建っているのが見える。華北ではこのような集村と呼ばれる集落形態が主流である。車は幹線道路を外れて舗装された村道に入り込んでいき、幾つかの集落を回って同乗者を次々と目的地へ下ろしていく。集落のなかには四角い壁に囲まれた家々が碁盤の目のように並んでいる。各戸の外壁の周囲にはコンクリート打ちの張り出した縁側のような部分があり、燃料用の果樹の枝を積んでおく場所、あるいは夜村民同士が賭けトランプに興じたり夕涼みをしたりする社交の場として機能していた（写真3）。車を降りて土の道を目的地まで歩く。

友人宅は平屋で、入ると中庭を挟んで奥に母屋がある。手前は屋根付きの物置きと汲み取り式トイレ、右手に太陽熱給湯のシャワー室がある。屎尿（しにょう）は時々裏手のブド

ウ畑へ運ばれる。母屋には台所のほか三つの居間兼寝室があり、うち二つは炕である。炕付きの寝台は一メートルほどの高さで、筆者はこの上に寝泊まりした（写真4）。隣室の台所のかまどと鉄パイプで繋がっているが、夏は塞がれている。母屋の床や壁はタイル張りである。

滞在中は、友人のご両親に炒め物や包子（バオズ）（餡入り饅頭）など手作りの家庭料理をご馳走になった。普段は手軽なガスレンジを使っているそうだが、時にかまども併用する（写真5）。友人宅のかまどはかなり大きく、燃料は果樹の小枝などである。上部に作り付けの大鍋がある。生活用水は水道を使い、中庭の小さな簡易式井戸は長らく使っていない。

この家は友人の父が一九八三年の結婚を機に建てたという。中国では伝統的に結婚する際に男性側が新居を建てる習慣があるが、近年都市部で就業する若年層が増加しており、この習慣にも変化の時期が訪れている。友人は熾烈な受験競争をくぐり抜けて北京で学んでおり、弟も省内の大学に在学中とのことである。筆者が出会った農家の多くは教育熱心で、現金収入の大半を子供の学費に充てる親も少なくない。親の表情には子供の将来への期待が溢れている。中国の住まいをめぐる一連の変化は、家族像の移ろいをそのまま反映していると言えるのではないか。

さて、冒頭の炕の登場する俳句は旧日本陸軍軍人で満蒙（まんもう）開拓移民の父と呼ばれた東宮鉄男大佐の手になるものである。以前中国東北出身の骨董収集家から旧日本軍の遺留品を見せられた時、和紙に丁寧に毛筆で認（したた）められた俳句集を目にした。そのなかの二首である。本来なら親の仇の作品と言って良いだろうが、収集家はそのことより経済的価値に主たる関心があるようだった。無論私には価値を判定することはできなかったが、北国の生活感溢れる趣深い俳句は不思議と記憶に残った。最初の句は「東宮鉄男伝」の満州国軍事顧問時代の日誌にみえる。私が試みに内容を訳した時、収集家が「長年手元にあったが、今初めて意味を知った」と感慨深げにつぶやいた二番目の句は、探しても見つからなかった。真偽のほどはいかに。

（やまだ　ななえ／アジア経済研究所　環境・資源研究グループ）

3. 村の目抜き（？）通り。屋根の上に見えるのは太陽熱給湯システム（山東省煙台市蓬莱、2009年9月筆者撮影）

4. C村友人宅の炕。上方には蚊帳が、窓の向こうには中庭が見える（山東省煙台市蓬莱、2009年9月筆者撮影）

5. かまどの大鍋で茹で上がる餃子（C村とは別の村の写真）。側面に金属製の引き出しが内蔵されていて湯を沸かすことができる。かまどは一家団欒の象徴（山東省煙台市莱陽、2010年2月お茶の水女子大学・船戸はるな氏撮影）

《参考文献》

①韓俊等「新農村建設与優化村庄布局」（李剣閣主編『中国新農村建設調査』上海遠東出版社、二〇〇七年）。

②国務院第二次全国農業普査領導小組弁公室・中華人民共和国国家統計局編［二〇〇八］「中国第二次全国農業普査資料総合提要」中国統計出版社。

③田原史起［二〇〇九］「水利施設とコミュニティ―中国山東半島C村の農地灌漑システムをめぐって」（『アジア経済』五〇巻七号）。